雪像彫刻
― その可能性と展望 ―

松村　晃泰
倉敷芸術科学大学芸術学部

（2015 年 10 月 1 日　受理）

1　はじめに

「雪像」と聞くと日本人の多くは、「さっぽろ雪まつり」の「大雪像」を思い浮かべるだろう。それは、映画やアニメの世界、有名建築、史跡などがモチーフとなっており、芯棒などの骨組みを入れず、雪のみで制作されている。この「大雪像」を目の前にすると、誰もがその迫力に圧倒され、モチーフを忠実に雪で再現した技術と美しさに驚くだろう。夜間はライトアップされ、光のコントラストが際立ち、昼間とは違った趣を見せるので、一日中「大雪像」の前は記念撮影をする人々で黒山の人だかりである。

同じ雪像でも「小型雪像」とされる、2 メートル立方程度の大きさの「市民雪像」や、3 メートル立方程度の「国際雪像コンクール」の会場は、人々が歩きながら眺め、時折出来栄えの良い雪像の前で足を止めたり、写真を撮る程度である（図 1）。もちろんこれらの雪像も基本的には（安全対策の為市民雪像には芯棒が入れられている）雪のみで制作されており、中には技術力や芸術性の高い作品もある。

「大雪像」が非日常のスケールやエンターテイメント性により、多くの人々を惹きつけ、魅了するのは当然のことであろう。しかし、著者の経験から、わずか数メートル立方の「小型雪像」には、「大雪像」に無い多くの可能性が秘められていると確信している。「小型雪像」を鑑賞・制作して楽しむ機会を増やし、さらにその質を高める事により、その認知と普及を進めていきたいと考える。

そこで本稿では、著者の経験を元に「雪像彫刻」の制作プロセスや道具、素材について、また国内外の「国際雪像彫刻大会」、国内の「市民雪像コンクール」の概要を紹介し、「雪像彫刻」の理解を深め、その特殊性から生まれる可能性について考察したい。

図 1　さっぽろ雪まつり　市民雪像

2　雪像彫刻とは

「雪像彫刻」という言葉は日本ではほとんどなじみが無く、雪で作った造形物は「雪像」

という呼称が浸透している。その名の通り、何かしらの「像」（人や物などの形を模したもの）を制作することがほとんどである。インターネット検索においても、「雪像彫刻」より「雪像」の方がより多くの情報を検出することができ、いくつかの雪像コンクールの情報を得ることもできる。

一方、英語で「snow sculpture」を検索すると、雪像彫刻大会など、多くの情報を得ることができる。Wikipedia によると「野外で実施される、サンドアートや氷の彫刻に匹敵する彫刻の種類。パフォーマンスアートの側面ももつ」など、そのほか材料や道具についても紹介されている。このことは、北米をはじめ、海外では「snow sculpture」は芸術のジャンルや芸術作品として確立されており、認知も広く、それを求める人や、その場をつくり提供する人々が、日本に比べ多いということが推測できる。著者もアメリカ合衆国カリフォルニア州タホで開催された「CARVE TAHOE」、カナダユーコン準州ホワイトホースで開催された「Whitehorse International Snow Sculpture Challenge」にそれぞれ招待され参加したが、参加作家へのサポートや、鑑賞者の作品への関心、制作期間中も含めたイベントづくりには感心させられた。また、中国黒竜江省哈爾濱市で開催された「太陽島雪博祭」では、「市民雪彫大会」の作品が多数展示してあり、その高い技術力に目を奪われた。が、何よりほとんどの作品が、単なる模倣に留まらず、それぞれの世界感を表現した作品に仕上がっていたことに驚かされた（図 2）。

著者は「snow sculpture」や「雪彫」のように、日本国内においても「雪像」が、一つの芸術作品として認知が確立され、多くの人々の関心・感動を呼び起こす存在になって欲しいと考えている。そのためには、現状の「雪像」から脱却し、模倣に留まらない独自の世界を表現する「雪像」が数多く制作されることが重要と考えている。そして、このような意識を持って制作される「雪像」を著者は「雪像彫刻」と呼ぶことにする。これは「雪像」を否定するのではなく、模倣をきっかけに広がるイメージの世界は、より広大で自由で楽しいものである、ということを知る・感じる機会を増やすための試みの一つであるということを付け加えたい。

図２　太陽島雪博祭　市民雪像

３　素材の特性

雪像彫刻の一番の特性は、雪という素材にある。多くは天然の雪を利用するので、地域によっては材料は豊富にある。野外で基本的には雪のみで制作されるので、気温が上がれば溶けてなくなる環境にやさしいエコ素材である。木製の型枠に雪を詰め、重機や人力で圧縮してブロック状の雪塊にし（図 3）、カービングによって造形されることがほとんどで

ある。また、雪質や気象コンディションによっては、塑像のように雪を盛り付けたり、別で造形したものを結合させるモデリングもできる。加工は容易で、楠や大理石を彫る感覚に似ているが、木彫や石彫より簡単な手道具によって、大型でダイナミックな作品を短期間で制作することが可能である。制作者にとって、自らの力のみで素材と対峙する感覚、そして雪塊のスケール感と制作のスピード感が、たまらない魅力であるが、鑑賞者にとっても、安全にダイナミックな制作をライブで楽しむ事ができるため、エンターテイメント性、パフォーマンス性の高い素材と言える。

雪は天然素材であり、気象コンディションによってその質が大きく変わってしまう。これは雪像彫刻の難しさであり面白さのひとつである。毎年同時期に同じ場所で開催される「国際雪像彫刻コンクール」でも、毎回雪質は変化する。気象コンディションに恵まれ質の良い雪を集めることができれば、上質の大理石にも劣らぬ、純白の美しい素材となる。自然光の元この天然素材の美しさと、表面のディティールを楽しむのも良いが、夜間のライトアップはさらに雪像彫刻の魅力を増す効果がある。闇の中、数灯のライトによって照らされると、昼間は一面の銀世界の為、はっきりとらえることができなかったフォルムが浮かび上がる。そして凹凸はより鮮明に表現され、ドラマチックな変化を起こすのである。

４　雪像彫刻の制作方法

雪像彫刻の制作方法は大きく分けて２通りある。一つは、雪だるまのように雪を集め、盛り付けたり削ったりして、造形していくモデリング形式の制作方法。もう一つは、型枠に雪を圧縮しながらつめ、雪のブロックを作り（図３）、彫りだして造形していくカービング（木彫や石彫のように塊をマイナスしていく）形式の制作方法。前者は、湿気の多い雪の地域、雪玉や雪だるまが、容易にできるコンディションでの制作に有効である。後者は、パウダースノーと呼ばれるような、湿気の少ない雪の地域、雪玉や雪だるまを作りにくいコンディションで制作する場合採用され、事実上この方法を取らざるを得ない。

実際の制作では、カービング形式を基本とし、雪質や気象コンディションによって、モデリング形式を取り入れながら制作する場合がほとんどである。よって、それを踏まえて作品デザインを考え、制作に取り組む事が美しくより魅力的な作品を仕上げるポイントとなる。気象コンディションに合わせて、降雪や水を使用して補修や盛り付けをすることもできるが、水分を多く含む雪を使用すると、その部分の見た目も硬さも変容してしまうので、その場合は注意が必要である。また、制作期間中に

図３　型枠が剥がされ雪魂があらわれる

降雨や強い日差し、気温の上昇により雪が解け、その後気温が下がり再氷結すると、その部分がかなり硬くなるので、鋭利な刃物を使用しないと加工が難しくなる。よって、制作中の雪魂のコンディションには細心の注意が必要である。

「国際雪像彫刻大会」では、切り出した雪塊を積み上げたり、別で加工し後から取り付けたり、様々なテクニックを巧みに取り入れる。また、水の使用が禁止されているコンクールもあり、その場のあらゆるコンディションを見極め、作業工程を検討し作品のデザインを微妙に調整していく柔軟性が必要となる。

５　雪像彫刻の制作期間と制作道具

「雪像彫刻」の制作期間はその規模によりまちまちである。「国際雪像彫刻大会」であれば、その標準的なサイズは３～4m 立方、およそ 30 ～ 60 トンの雪を使用し、３～４名のチームで、３～４日程度である。「市民雪像コンクール」では、人数制限なし、３～５日が標準的である（詳細は市民雪像コンクールの項で述べる）。一方、さっぽろ雪まつりの「大雪像」は高さ約 15 メートル、およそ 2500 トンの雪を使用し、自衛隊員や札幌市職員などをはじめ多くのボランティアによって、約１か月をかけ制作される。小型の「雪像彫刻」では高所作業時でも簡単な足場や脚立があれば十分であるが、「大雪像」は建設現場さながらの重機や足場を使い制作される。このように「大雪像」に比べ「雪像彫刻」は必要材料は少なく、少人数で短期間に安全に完成させることができるので、鑑賞者は出来上がった作品だけではなく、その制作過程も楽しむことができる。

図４　アラスカチームの手道具

「雪像彫刻」の制作道具は氷彫刻のような特別な道具として制作・販売はされていない。よって、流用可能な氷彫刻用の道具の鋸・鑿以外は自作するか、市販の道具を流用する。また、「国際雪像彫刻大会」の場合、電動・エンジン工具の使用は禁止されているので、人力で加工するいわゆる手道具のみを使用し制作する。制作場所のコンディションや制作者によって違いはあるが、主に、角スコップ、シャベル、有刺鉄線、ワイヤー（自作ビーズ付）、アイスドリル（ワカサギ釣り用）、ケレン棒（市販・自作）、スクレイパー、左官ごて、メンディングプレート（自作持ち手付き）、サンドペーパーなどを使用する。「大雪像」の場合もほぼ同じ手道具を使用するが、作業の効率化を図るため、有刺鉄線やワイヤーの代わりに重機やチェンソーなどの電動・エンジン工具を使用したり、型枠をつくり何種類もの部品を制作したりする。

６　雪像彫刻の制作手順

雪像彫刻の基本はカービングなので、その制作手順も石彫や木彫をイメージすると理解がはやい。天候や雪質により前後される手順や、変更される内容もあるが、ここでは基本的な手順を示すことにする。

図５　ケガキ～アイスドリルでの穴あけ

①ケガキ：正面、背面、天場（上面）、側面と全面に作品の図像を描く。耐水チョーク、ラッカースプレーなどを使用する（図5）。

②大落とし：必要のない部分にワイヤーやアイスドリルなどで切れ目を入れ、必要に応じて角スコップ、ケレン棒などを使用し切り落としていく（図6）。上部や側面に付け足す雪塊がある場合や、別で成型し後に取り付けるパーツがある場合は、切り落とした雪塊を利用するので大切にとっておく。付け足しをする場合は、ブロック状に成形すると積みやすいので、氷鋸を使い切り出すと無駄なくきれいにできる。

図６　ワイヤーで切り目を入れて角スコップで落とす

③荒落とし（荒付け）：アイスドリルやケレン棒を使い全体的におおよその形を彫りだす。付け足しをする場合は、ブロック状に成形した雪魂を積んでいく。また付け足した部分は気温の高い時間帯（日中）に隙間なく積み上げ、一度気温が下がった後（一夜おいて翌朝以降）に荒落としをする。

④成型：足場が届かない部分（作品に乗り彫る部分）や、制作上基準となる部分から、メンディングプレートやスクレイパーなどを使用し成型していく。素材自体に穴が開いている場合（雪魂ブロックを作る際、できてしまった隙間）は、よりきめの細かい雪（新雪）を詰め込む。この時、足場が届かない部分（作品に乗り彫る部分）は手順⑤も同時に行う。また、別で成型したパーツがある場合も手順⑤を完了した状態で取り付ける。

⑤仕上げ：作品の上部や制作上基準となる部分から、サンドペーパーなどを使い全体を研磨し表面を滑らかにする。

先にも述べたように、これらの基本的な手順を元に、様々な状況を考慮して制作を進めていく。「国際雪像彫刻大会」のように短期間で制作する場合の作業時間は、午前８時から午後８時くらいが基本であるが、気候や作業工程により昼間に休息を取り深夜まで作業をしたり、早朝に作業をする場合もある。３日～４日の短期間で仕上げるため、柔軟な作業計画と的確な状況判断が求められる。制作期間の長い「市民雪像コンクール」などは、

雪魂のコンディション管理と、気象コンディションに配慮した作業計画が重要になる。

7　国際雪像彫刻大会概要

日本国内で開催される国際雪像大会は、「さっぽろ雪まつり」で行われる「国際雪像コンクール」と、北海道名寄市の「なよろ雪質日本一フェスティバル」で行われる「なよろ国際雪像彫刻大会」である。札幌は1974年から、名寄は2000年から開催されている。国外の大会としては著者の知る限り、アジアでは中国。北米ではアメリカ合衆国、カナダ。南米ではアルゼンチン。ヨーロッパでは、イタリア、フランス、スイス、スウェーデン、ロシアなどで開催されている。古くは1980年代から始まっており、20年前後の歴史があるものがほとんどである。日本同様Festivalや Carnivalといった、冬のお祭りのイベントの一環として開催されている。長期にわたり継続されていることから、冬の芸術文化事業として、それぞれの開催地に根付いていると考えられる。また、冬季オリンピック開催に合わせ、その開催地で特別に開催される大会もある。開催地は気温が常に低いこと、雪が豊富にあることが絶対条件となるため、開催国の中でも北方の地域や、スキー場などがある山岳地帯がそのほとんどであるが、「哈爾濱国際雪像彫刻大会」では、極寒ではあるが降雪量が極端に少ないという環境のため、人工雪が使用されている（図7）。

図7　哈爾濱国際雪像彫刻大会（2012）

大会への参加手順・条件はどの大会もほぼ変わらない。まず、大会へのエントリーをする。参加者全員の基本情報はもちろん、制作予定作品のタイトル、スケッチ、コンセプトなどを記入したエントリーフォームをEメールで大会事務局へ送る。作品のテーマは自由に設定できる大会がほとんどであるが、通常の芸術作品と同じく、特定の企業、政治、宗教などをテーマにしたもの、公序良俗に反するものは、公共空間にふさわしくないので、書類審査で不採用となる。書類審査の後、出場チームが決定される。決定後、現地までの旅程、国外の場合はパスポートナンバーなど詳細を事務局に連絡したり、気温や雪の状況など情報提供を求めたりして大会に備える。使用する道具は各チームで用意する。電動・エンジン工具は使用禁止。足場や脚立、ショベルや雪かきダンプ、夜間照明などの共用具は主催者が準備する。大会期間中の宿泊、食事は主催者により提供される。交通費は基本的に支給されないが、補助金や航空券を用意する大会もある。大会（competition）なので、順位や様々な賞が設けられているが、賞金が与えられることは少ない。作品の審査は、制作終了後の定められた時間に、芸術家や評論家などの専門審査員と、市長や実行委員会長などの一般審査員の複数による採点方式で行われる。テーマ、芸術性、創造性、技

術力など、事前に予告された内容の項目ごとに採点され、受賞者が決定される。このほか、鑑賞者の投票による市民賞や、参加者が自らのチーム以外の優れた作品を選び投票し選出される芸術家賞を設ける大会もある。

大会は公的な資金により運営されるが、どの大会も民間企業の協賛、個人からの寄付やボランティアによるサポートが手厚い。国外の大会では世界的に有名なスポンサーがつくものもある。「なよろ国際雪像彫刻大会」では、期間中の昼食・夕食は様々なボランティア団体が手作りで用意してくれる。また、多くの通訳ボランティアを招集し、海外チームのサポートに尽力している。手厚いサポートと雪質の良さから、リピート参加のチームも多く、市民との交流も深まっている。

図８　哈爾濱国際雪像彫刻大会（2012）「Iing of hope」日本チームの作品

８　国際雪像彫刻大会参加チーム

参加チームは開催国のチームとその周辺国、つまり雪の多い国々のチームの参加が多い。しかし、雪になじみのないようなアジアのチームの参加も少なくない。タイ、マレーシア、インドネシア、シンガポール、インド、香港などである。北米やヨーロッパのチームでは、彫刻家やデザイナー建築家といったクリエイターを中心に、教師、農家、バーテンダーなど様々な職業を持つ参加者で構成されている。日本を含むアジアのチームも彫刻家をはじめとするクリエーターが中心であるが、先に示したアジアの国々のチームの特徴のひとつは、ホテルやレストランに勤務している料理人で、日常的に氷の彫刻をしている参加者が多いということだ。また、彼らは氷像彫刻大会にも積極的に参加しているようである。

著者のチームは、2004 年に彫刻家チームとして結成された。著者は 2008 年からチームに加入しており、これ以降毎年国際大会に出場するようになる。当初は 3 名で活動していたが、2011 年から海外の大会に多数参加するようになったため、徐々にメンバーを増やし、現在は 10 名で活動している。それぞれ作家活動以外にも仕事をしているため、大会スケジュールに合わせて、チームを構成している（図 8）。

９　チームスポンサー

いずれのチームも大会に参加するには多くのハードルを乗り越えなくてはならない。大会期間中の収入の補てん、会場までの渡航費の確保が一番大きなハードルである。カナダのホワイトホースという町のチームは、寄付によってそれを克服している。企業スポンサーはもちろん、スーパー、銀行、レストランなど町のあらゆるところに、各国の大会に

参加するための渡航費の寄付を募る募金箱が設置されている。「Whitehorse」という街を宣伝するために、あるいはカナダを代表して、このチームが世界中の大会に参加する。そのことが街の栄誉であり、未来への投資であるという考え方なのだろう。また彼らは「Whitehorse International Snow Sculpture Challenge」のホストでもあり、世界各国から雪像彫刻チームを招待している。この大会では、エアカナダが協賛しており、参加者に対しエアカナダ、あるいは系列グループの航空券を手配してくれる。カナダの芸術文化への理解と振興へのサポートの手厚さを感じずにはいられない。このほか、アジア各国のチームも企業スポンサーを得ている。タイ：シンハービール、マレーシア：マキタ、インドネシア：リゾートホテルなどで、スポンサーのロゴが入ったスキーウェアーで制作していた（図9）。珍しいケースでは、シンガポールの参加者の一人がタレントで、放送局や多くの関係スポンサーのサポートを得て参加している例もあった。

図９　多くの協賛を得たチーム

著者のチームは、2014年「CARVE TAHOE」の際、開催地でも店舗展開をしている日本食レストラン「MIKUNI　Japanese restaurant & sushi bar」に航空券、食事の提供を受けた。またこの時、各国の参加者に日本酒の紹介をしたいと思い、その提供を現地法人を構える各酒造メーカーに打診したところ、兵庫県姫路市に本社があるヤエガキ酒造株式会社に純米大吟醸酒の提供を受けることができた。しかしながら、今のところ継続的なスポンサーは存在しない。サポートを受けるには、我々のさらなる努力と、雪像彫刻や国際雪像彫刻大会の認知と理解を広げていく必要があると考えている。

10　市民雪像コンクール

日本国内において「雪祭り」は、2月を中心に各地で開催されており、内容も地域ごとに様々である。開催時期が短期間に集中しているので、詳細を検証することは非常に難しい。インターネット検索によると、イルミネーションやキャンドルライトを使用したライトアップイベントの情報が非常に多く、人気の高さを示している。そして最近急激に増えているのが、プロジェクションマッピングのイベントである。

「市民雪像コンクール」を開催している雪祭りは非常に少く、イベントとしての難しさを反映しているものと思われる。著者が実際鑑賞した市民雪像コンクールのほか、主にインターネット検索を元に、そのホームページや事務局への問い合わせによってリサーチを行った。それぞれの事情によりその詳細は様々であるが、概要をまとめると次のようになる。

①参加希望者は事前に作品のデザインを決め、エントリーする。

②ブロック状の雪魂が主催者により準備される。
③道具は各自が準備する。電動・エンジン工具は使用禁止。
④制作者の人数制限はない。
⑤雪のみで制作。着色はしない。（安全上の理由で心棒を使用する場合がある）
⑥賞金や賞品が用意されている。

北海道内のほとんどのコンクールがこれに当てはまり、国際雪像彫刻大会とほぼ変わらない条件である。大きく異なる点は、賞金や賞品が必ず準備されていること、制作者の人数制限がないこと、開催地により大きさと制作期間に幅があることである。大きさは 1.8m 立方くらいから大きいものでは 5.4m 立方、制作期間は 5 日から 3 週間くらいを設定している。期間が長いコンクールに関しては、参加市民の都合（平日の昼間は仕事をしているので夜間の数時間しか作業できない）と気象コンディション（夜間は気温が下がり作業しやすい）を考慮したためで、実際の作業時間はそれほど長くないようだ（註 1）。

同形式を採用するコンクールで、特筆すべきは「田沢湖高原雪まつり」（秋田県仙北市）「郡上たかす雪まつり」（岐阜県郡上市）である。「田沢湖高原雪まつり」は、3.6m 立方の雪塊から作品を 3 日間で制作する。「雪像職人」と呼ばれるような国際雪像彫刻大会経験者に指導受けながら参加者が雪像制作を行っている。大学生チームの参加が多く、そのチームには宿泊と食事のサポートをしているということが特徴的である（註 2）。「郡上たかす雪まつり」は、3m 立方の雪塊から作品を昼間の 10 時間で、チェーンソーなども使用し制作する。参加費が 1 万円必要であるが、優勝賞金は市民雪像コンクールでは破格の 20 万円・副賞である。また、すべてのチームに賞品・参加賞が与えられる（註 3）。

形式は全く違うが、「十日町雪まつり」（新潟県十日町市）は大変興味深い。「十日町雪まつり」は大型の雪像彫刻の市民コンクールを開催している。本州最大の雪像彫刻群を鑑賞できる雪祭りで、そのスケールと数、技術の高さは圧巻である。著者がまず驚いたのは意識の高さである。ここでは「雪像」ではなく「雪の芸術作品」と呼んでいる。十日町市民をはじめ訪れた多くの人々は、芸術作品としての意識をもって鑑賞することだろう。そして、その高い技術は、66 回の歴史をただ繰り返すだけではなく、専門家による技術講習（2 年に 1 度）や、参加者同士の技術探究（勝ちたいというプライド）により培われたものである。作品は芸術部門、特別部門、学童部門に分かれており、その総数は 2015 年で 75 点。それぞれ大きさや参加条件が異なるが、コンクール対象は芸術部門（2015 年、34 点）のみである。芸術部門のほとんどのチームは、市内の各地域ごと編成されたチームで、制作現場の確保から、雪の収集、制作、完成まで、すべて自分たちで完結しなければならない。そのため、制作時間や作品のスケールも様々であるが、大きいもので高さ 10m にもおよび、多くの作品が幅、奥行きともに 10m はスペースを確保し、3 週間ほどの制作期間を最大活用し完成させる（註 4）。十日町市はきもの産業が伝統の地場産業で、それに携わる人が多く、日々の暮らしの中で美的センスが磨かれ、芸術を好み楽しむ素地が自然

とできたのではないかと推測する。近年では「大地の芸術祭 越後妻有アートトリエンナーレ」で脚光を浴びているが、1995年から20回開催された「十日町石彫シンポジウム（80点以上の作品を恒久設置）なども、十日町市の人々の芸術文化への熱い取り組みを象徴するものと言える。

その他、著者が実際に鑑賞したものでは、「なよろ雪質日本一フェスティバル」が「国際雪像彫刻大会」と同時に同条件で、「全日本学生対抗スノーオブジェ競技会」を開催している。他のコンクールとは傾向が違い、抽象表現の作品が多く制作されている。「いいやま雪まつり」（長野県飯山市）は「十日町雪まつり」を参考に、市民参加の大小の雪像を広く募集し、そのレベルアップを図ろうと努力している。大型雪像部門に高校生チームの参加が多く、同部門の大ベテラン参加者と仲良く談笑していたのが印象的であった。「さっぽろ雪まつり」は市民雪像コンクールの中でも別格と言っていいだろう。参加希望者が非常に多く、抽選によって参加が決定される。2015年の「さっぽろ雪まつり」大通会場募集数80基に対し686件の応募があったそうだ。しかしながら、つどーむ会場は5基の募集に対して2件しか応募がなかったようで、会場（立地）による人気の差がはっきり出たかたちである（註5）。毎回200万人を超える来場者と長い歴史、規模の大きさなど魅力は多いが、より質の高い作品を生み出す仕掛けも必要ではないかと考える。

11　雪像彫刻の可能性

雪の特殊性をまとめると次のようになる。多くの降雪が期待できる地域であれば、材料費はかからない。気温が上がれば溶けて無くなる、天然素材である。加工の容易さから、簡単な手道具のみでカービングを楽しむことができ、気象コンディションやその使い方によって、モデリングもできる。また、大型の作品を短時間で制作することができ、夜間のライティングによる変化も楽しむことができる。つまり、造形芸術素材として、コストパフォーマンスに優れ、環境に完全還元されるエコ素材で、加工が容易で、パフォーマンス性、エンターテイメント性の高い、美しく素晴らしい素材である。唯一と言って良い難点は、安定性に欠けることだ。一定のコンディションに保つことは不可能である。しかし、それこそが他の造形芸術素材にない魅力と可能性に他ならない。

雪は、本格的なカービングを体験するには最適の素材と考える。雪質に合わせた道具選びと、簡単な技術レクチャーで、素早く美しい形を作り上げることができる。そのスピード感とダイナミックな制作スタイルは、子どもから大人まで楽しめるワークショップにも応用できる。作品制作のみならず、エコロジーや温暖化など、地球環境を見つめ直すきっかけとなる内容も加えると、さらに意義深いものになるだろう。

大型の作品を制作する場合は、数名～数十名のチームにより共同制作をすることになる。作品の立案から完成まで、イメージと現実の差異、気象コンディションの変化、個々の能力の特性など様々な要因により、計画を常に変更・修正しながら作品制作に取り組ま

なくてはならない。これらの問題を乗り越え作品を制作することにより、①主体性と協調性のバランス感覚を磨く。②コミュニケーション能力を養う。③状況分析、判断力を育てる。以上の事が期待できる。もちろん他の造形芸術素材でもこれらの事は可能であるが、雪は、精神と肉体、技術のバランスをうまく保たなければ、思うように扱うことができない。しかも、時間や気象状況など制約の多い素材であるため、より効率的にこれらの感覚を高める事ができると考える。作品制作を通じ感じたこと、時間、作品、すべてはやがて流れ、目には見えなくなってしまう。短時間に諸行無常を体感し、多くを学ぶことができる「雪像彫刻」の共同制作は、教育ツールとしての可能性を十分に備えていると言える。

12　さらなる飛躍のために

雪像彫刻のさらなる認知と普及には、既存の市民雪像コンクールの進化によって、その魅力を伝えていく努力が必要と考える。どのコンクールも、それぞれの歴史や事情によって確立された大会であるので、基本的なスタイルを変える必要はない。しかし、国際大会で制作されている作品やその表現の内容を紹介し、参加者の作品内容の幅を広げ、技術の向上を促す取り組みは必要であると考える。美術やデザインなどの専門家によるレクチャーを行ったり、制作経験者による技術指導は有効な手段の一つであろう。また、国際大会のルールやその内容を知り、国際基準に近いスタイルに補正したり、そのような部門を新たに設定することも、世界に通用する作品レベルにしていくための一案である。「さっぽろ雪まつり」のように、人気の高いコンクールは、抽選のほか選抜枠を設ける、キャラクターの模倣は全体の〇％までに設定するなど、全体のレベルアップをはかる仕掛けはいろいろ考えられるだろう。

十日町や飯山のように、大型の雪像彫刻を制作するコンクールは、新たな可能性を模索していく時期にきていると考える。いずれも過疎化、高齢化が進み、参加を断念せざるを得ないケースが出てきていると聞く。多くのマンパワーと時間が必要な大型の雪像彫刻にとって大きな問題である。そこで提案したいのが、滞在交流型共同制作である。

その概要は、①開催地域の市民と、大学生（芸術・教育系で日常的に制作を行っている大学）が共同で作品を制作する。②参加する大学生は大学ごと、あるいは大学連合のチームとする。③市民と大学生が共同で作品案を考える。④市民は制作期間中の宿泊場所と食事の提供（ホームステイが望ましい）をする。というものである。それぞれのメリットは、①市民は、お祭りや作品のボリュームを保つことができ、学生は普段の制作では扱えない素材によって、大型作品を制作する体験を得ることができる。②市民が学生に雪像彫刻技術を教え、学生は専門的な立場から、新たな作品案を提示することにより、それぞれのスキルアップができる。③市民は伝統の継承と継続が期待でき、学生は伝統文化に触れる機会と、文化事業改革に参加する機会を得ることができる。というところにある。それぞれの経済的な負担は避けられない問題であるが、それに変える事の出来ない価値を見出すこ

とができる企画と確信している。また、一時的なボランティア感覚ではなく、継続的にお祭り（作品制作）に関わり、コミュニケーションを密にすることにより、高い信頼関係を築き、技術・文化の伝承のみならず、世代や地域を超えた芸術文化振興を目指すことが重要と考える。このためには、大学側も参加学生に対し補助金を支給したり、課外実習などの授業単位として認める措置を取るなど、積極的な取り組みが必要である。

その他、既存の雪像コンクールに、高校や大学などの学校単位で競う部門を設け、若手の育成を積極的に行ったり、変色 LED によるライトアップやキャンドルを取り入れる条件を加え、作品の魅力を広く引き出す方法も考えられる。さらに、全く別の考え方としては、大型冷凍庫内で、厳冬期以外に雪像彫刻大会を開催しても面白い。

13　雪像彫刻の展望

日本経済を取り巻く環境や、地方都市の過疎化や高齢化の現状を考慮すると、雪祭りの展望は楽観できるものではない。ましてやその制作・鑑賞において、地域や期間がより限られる雪像彫刻の展望は、非常に厳しいと言わざるを得ない。しかし、雪に親しみ、雪とともに生活してきた人々にとって、雪祭りを継続し地域の活性化に繋げることは、望みであり未来への希望の一つではないだろうか。そのためには、これまでの慣習にとらわれない柔軟な発想によって、雪を最大限に活用し、少しでも多くの人にその魅力を伝えていかなくてはならない。WEB を通したきめ細やかな情報発信や、新聞・テレビなどを通した情報メディアの有効的な活用を積極的に行うことも、これからは大いに必要になるだろう。このような時代のなか、目先の経済に惑わされず、大きな視点で雪祭りを捉えたとき、「我々の雪祭りには、雪像彫刻が必要である。」と思ってもらえるよう、著者も情報の発信に努めていきたいと考える。また、芸術系の大学を中心に、雪像彫刻制作を教育ツールの一つとして活用できないか提案し、その認知と普及に努め、一人でも多くの雪像彫刻制作経験者を生み出し、彼らの芸術家としての大成はもちろん、「雪像彫刻」の魅力を伝える伝道師になってくれることを望んでいる。

これまで「国際雪像彫刻大会」「市民雪像コンクール」をはじめ、雪祭りを開催・運営してきた主催者・関係者の方々の努力、労力には著者の想像が及ばぬ事もたくさんあるだろう。だが、継続に満足せず、より質の高い、より魅力的な雪祭りを求め、独自のスタイルを確立してほしいと思う。そしてそれは、市民が楽しむために市民が選び市民が実行する、市民が主体のものであるべきと切に願う。

最後に、本稿執筆にあたり、取材にご協力いただいた皆様に深く感謝いたします。また、著者のチームが参加したすべての雪像彫刻大会の主催者・協賛者、チームに協賛いただいた皆様に深く感謝いたします。

参考

「さっぽろ雪まつり」（さっぽろ雪まつり公式サイト，http://www.snowfes.com/，2015 年 8 月 12 日）.
「雪像彫刻」（グーグル，https://www.google.co.jp/#q=%E9%9B%AA%E5%83%8F%E5%BD%AB%E5%88%BB，2015 年 8 月 12 日）.
「雪像」（グーグル，https://www.google.co.jp/#q=%E9%9B%AA%E5%83%8F，2015 年 8 月 12 日）.
「snow sculpture」（グーグル，https://www.google.co.jp/#q=snow+sculpture，2015 年 8 月 12 日）.
「snow sculpture」（ウィキペディア，https://en.wikipedia.org/wiki/Snow_sculpture，2015 年 8 月 12 日）.
「旭川冬まつり」（http://www.city.asahikawa.hokkaido.jp/files/kankou/awf/，2015 年 9 月 3 日）.
「おびひろ氷まつり」（http://obihiro-icefes.com/，2015 年 9 月 3 日）.
「ふかがわ氷雪まつり」（https://www.city.fukagawa.lg.jp/cms/section/shokoro/ik75k4000000cdo1.html，2015 年 9 月 3 日）.
「大沼函館雪と氷の祭典」（http://www.onuma-guide.com/osusumeblog01/2009/12/2010-1.html，2015 年 9 月 3 日）.
「あばしりオホーツク流氷まつり」（http://abashiri.jp/tabinavi/18ryuhyomatsuri/index.html，2015 年 9 月 3 日）.
「いわて雪まつり」（http://www.iwateyukimatsuri.com/，2015 年 9 月 3 日）.
「郡上たかす雪まつり」（http://kankou.takasu.or.jp/event.html/action~agenda/exact_date~3-2-2015/，2015 年 9 月 3 日）.
「田沢湖高原雪まつり」（http://www.tazawako.org/，2015 年 9 月 3 日）.
「十日町雪まつり」（http://snowfes.jp/wp/，2015 年 9 月 3 日）.

註

(1) 網走市役所観光課・旭川市経済観光部観光課，電話取材，2015 年 9 月 16 日.
(2) 田沢湖観光協会 小松尚氏，メール取材，2015 年 9 月 14 日.
(3) 郡上たかす雪まつり実行委員会，電話取材，2015 年 9 月 16 日.
(4) 十日町雪まつり実行委員会事務局　金澤克夫氏，電話取材，2015 年 9 月 16 日・17 日.
(5) さっぽろ雪まつり実行委員会，電話取材，2015 年 9 月 17 日.

Snow sculpture
— possibility and prospect —

Teruyasu MATSUMURA
college of arts,
Kurashiki University of Science and the Arts,
640 Nishinoura, Tsurajima-cho, Kurashiki-shi, Okayama 712-8505, Japan
(Received October 1, 2015)

In Japan objects produced by snow are called "snow figure's". The word "snow figure" for many Japanese brings to mind the "large snow figure's" seen at "Sapporo Snow Festival, Hokkaido". "Large snow figure's" are great fun; they can be used to reproduce precisely the motifs of celebrities, movies themes, cartoon characters and famous historic buildings.

However, I feel this typical Japanese view of "snow figure's" limits the artistic expression when using snow.

Therefore I'd like to advance recognition and the spread of "snow sculpture's", which express the wider art world in it's various forms.

This report introduces the production process, tool, and material of "snow sculpture", and further introduces a summary of the "International Snow Sculpture Competition" and the "Citizen Snow figure Contest" in Japan. Finally, this report discusses the particularity and possibility of using snow for artwork.